令和３年度学校評価報告書　　【国立市立国立第七小学校】

学校教育目標	中期経営目標(カッコの数字は経営方針の番号)	短期経営目標	具体的な方策	評価指標	当初	達成状況 中間評価	達成状況 最終評価	成果	課題	学校関係者評価
かしこく	○教員の資質向上（２）	①授業を支える授業規律を身に付けさせる。	○授業開始と終了時のあいさつを学年で統一し、指導する。（先言後礼） ○「発言をするときは、挙手をし、指名されたら『はい』と返事をし、起立して」発言をさせる。語尾まで、しっかりと言うことを指導する。 ○児童が発言しているときは「話し方のかきくけこ」「聞き方のあいうえお」を意識させる。 ○休み時間の過ごし方「①次の授業の準備②トイレ・水のみ③教室移動④自分の席で静かに待つ」のルールをクラス掲示で全校に指導していく。	A　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの８０％以上の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 B　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの７０％以上８０％未満の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 C　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスで意欲的に学習に取り組んでいる人数が７０％未満。	74% B	75% B	81% A	授業開始と終了の挨拶を学年で統一することで、一貫した指導を行うことができ、自然とできる児童が増えた。また、休み時間の過ごし方のルールを基にしながら、児童に自分の目標を立てさせ自主的に行動できるようにできた。	「話し方のかきくけこ」は、実践できる児童は増えてきているが、「聞き方のあいうえお」については課題がある。話の聞き方が活動や学習の理解につながるとともに、話し方とも密接に関わっているという認識で指導していく必要がある。児童が互いに安心して学習に取り組める環境を整えていく。	・タブレットをツールとした体験学習など工夫した授業が展開されている。 ・当該学年の単元に関係する下学年の学習を行っていて、コロナによる休業期間や出席停止中の学習を取り戻せている。 ・聞き方の指導を徹底することで学習に取り組む姿勢が改善されると思われる。 ・学年相応の読書をしたり日記を書いたりする習慣を身に付けることで読み書きの力が身に付くと思う。 ・漢字の反復練習、自分の点数を記録し管理することで学習意欲を高めることができている。 ・先生方が熱心に指導方法を研究している成果が出ている。今後も学力の向上を図ってもらいたい。 ・書くことに苦手意識をもった児童も、友達と協力しながら学び合い苦手意識を克服していってほしい。 ・オンライン授業を実際にどのように実施しているのか、詳しく知りたい。 ・コロナ禍による様々な変化の中、学力面でも心配したが、成果が見られて良かった。
		②学年配当の漢字の読み書きを身に付けた児童を育成する。	○漢字指導の際、成り立ちや使い方、関連して一度に覚えた方がよいものについて教師が意図的に指導し、漢字学習への興味を高めさせる。 ○小テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて授業や家庭学習を活用して、繰り返し練習させる機会を設ける。 ○朝学習の時間、家庭学習の機会に、復習を取り入れる。	A　クラスの８０％以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B　クラスの６０％以上８０％未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C　成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの６０％以下の人数		72% B	77% B	授業での指導以外にも、家庭学習なども活用しながら繰り返し練習できるようにした。特に、高学年では「自主学習」を取り入れることで、意欲的に漢字の学習に取り組む児童が増えた。また、小テストなどで合格基準などを基にして繰り返し練習させたり、自分の点数を記録、管理させたりすることで、４月よりも能動的に学習に臨むことができる児童が増えた。	既習の漢字を定着させていく必要がある。各学年で日常的に実施しているミニテスト（漢字ドリルの確かめ）や学期末などのまとめテストでは、意欲的に練習する児童は多いものの、定着には課題がある。新出漢字を機械的に覚えるのではなく、成り立ちや使い方を意識して覚えるようにしていく。例えば、熟語で覚えたり短文づくりをしたりしながら、児童が漢字を日常的に「使える」ようにして指導していく。	
		③それぞれの学年で学習する計算技能を身に付けた児童を育成する。	○計算技能を身に付けさせる指導をする際、生活場面等の事象を通して計算の必要性をもたせたり、計算の方法や意味理解について説明させたりするなど、教師が意図的に指導し、計算への意欲を高めさせる。 ○テストなどで合格基準を設定してうえで成果確認をし、結果に応じて家庭学習をさせるなど、繰り返し練習させる。	A　クラスの８０％以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B　クラスの７０％以上８０％未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C　成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの７０％未満の人数		69% C	74% B	４、５年生では、授業の冒頭５分間で現在学習している単元に関連する問題に取り組む「パワーアップタイム」を設けたことで、下学年での学習内容の復習を日常的に取り組んできた。そのことが、中間評価から５ポイントアップにつながった。	漢字の学習と同様に、定着が今後の大きな課題であるといえる。今年度は、２学年で実験的に「パワーアップタイム」を実施したが、今後はその成果と課題を整理した上で、低学年も含めて、他学年でも実施を検討していく。また、計算の方法の理解は深まってきているものの、意味理解やそれを説明することについては課題がある。生活場面等との関連付けさせるとともに、既習事項と関連付けながら指導していく必要がある。その際、前述の「パワーアップタイム」も活用していく。	
		④意欲的に楽しく学習する児童を育成する。	○「学ぶ価値があり 学びの喜びがわくもの」という視点で教材を吟味・選定したり、地域素材を教材化したりするなど、体験的な活動も重視しながら、教材の精選・開発をしていく。 ○学習に粘り強く取り組む姿勢や、学習を調整しようとする態度をほめ、認め、価値付ける。さらに、学習に取り組む姿勢や態度について、適切に指導する。 ○子供同士のコミュニケーションが活発で、よい事はよいと認め、失敗や誤りを温かく見守っていく。学び合いにふさわしい学級の雰囲気づくりに努める。	A　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスの８０％以上の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 B　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスの７０％以上８０％未満の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 C　児童の自己評価と、担任のみとり(発言・提出物・ノート・態度等)により、クラスで意欲的に学習に取り組んでいる人数が７０％未満。	76% B	81% A	87% A	校内研究で２年間取り組んできた「協同推敲」によって、これまで書くことに苦手意識をもっていた多くの児童が、友達と協力しながら書くことで安心して取り組めるようになった。そのことが意欲にもつながったと考えられる。また、相手意識や目的意識を明確にした指導によって、これまで以上に「何のため」ということを児童が意識できるようになった。更に、高学年では自主学習を発達段階に応じて取り入れたことで、児童の自主性が向上してきている。	意欲的に学習に取り組める児童が増えた分、学習に苦手意識をもっている児童がより目立つようになってきた。そのこととをチャンスと捉えて、個別最適な学習ができるように、担任だけではなく関係機関とも連携しながら指導に活かしていく。	
やさしく	○人権教育の充実（１） ○生活指導の見直しと徹底（８）	⑤仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない良好な関係をつくることができる児童を育成する。	○児童への生活やいじめアンケートを実施した際や、学期に１回の担任との全員面接の際には、聞き取りを丁寧に行い、全職員で予防策・早期発見に努める。 ○生活指導夕会やいじめ・不登校委員会など教職員間で児童の様子を確実に把握し、早期対応の徹底を図る。 ○５年生とスクールカウンセラーの全員面談を実施し、心配な児童には改めて個別対応する。 ○ふれあい月間や、教科横断的にも児童に指導を繰り返し「いじめは絶対に許さない。」という、学校風土を根づかせる。	A　把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が０ B　把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件未満 C　把握から一定の解決まで3週間以上かかっている案件が3件以上	3件 C	1件 B	0件 A	ふれあい月間のアンケートを通して挙がってきた案件も全て解決し、今年度は一つの案件でずっと続いているものはなかった。教職員の未然防止といじめ対応に向けた取り組みが成果として考えられる。具体的な方策が、有効であった。 また、不登校対策の基本方針を全職員で確認し、早期対応のフローチャートも確認することができたことで、一貫した対策を続けている。	人権教育の充実として、いじめ対策については校内での共有と対策について、今後も共通認識を図っていく必要がある。今後はさらに不登校対応について、保護者にも明示しながら進めていく必要がある。多くの児童が安心して学習できる環境を、整えていく。	・七小の児童は優しい子供たちで、多くの方に見守っていただいている地域性の成果でもある。今後も相手の立場を思いやることや共感する力を身に付けていってほしい。 ・朝の見守りでの挨拶は、以前よりも元気な声で挨拶する児童が減ったように思われる。 ・見守りをしていて感じることは、自ら挨拶ができる児童は半数くらいである。きちんと挨拶や返事ができるようになってほしい。 ・学校だけでなく校外でも挨拶できている児童もいて素晴らしい。 ・マスクで表情が見えないことによるコミュニケーションの取り方が難しいと思うが、成果が見られて良かった。 ・コロナ禍で不登校児童への対応が気になっている。いじめ対応については、最終評価がAになっていて安心した。
		⑥自分を大切にし、自分に自信がもてる児童を育成する。	○自尊感情調査を実施し、特に数字の低い児童においてはそれぞれにあった自信のもたせ方を教職員で共有する。 ○学期に１回の担任による全員面接の際、児童の長所を一人一人伝えることで自己肯定感を高めさせる。 ○クラスや学年の係や当番、クラブ・委員会などの特別活動を通して、「自分が必要とされている」「大切にされている」と、児童が感じられるような場を設定し、学級・学年・学校への帰属意識をもたせ、自己肯定感を高めていく。 ○保護者と必要に応じて連絡を取り合い、児童のよさや、つまずきを共有し、「励ますポイント」を共有して児童に自信をもたせるようにする。 ○教室での様子や授業中の発言には、価値付けをするような褒め言葉を用いて、自己肯定感を高めていく。	A　自己受容評価１点台の児童が全校児童の5%未満 B　自己受容評価１点台の児童が5%以上１0%未満 C　自己受容評価1点台の児童が１0%以上	4,7% A		3.5% A	自尊感情が前回より1.2%下がり、自己肯定感の低い児童が減ったことが分かる。今年度は、工夫した中で実施できた「学校行事」の成功体験が一つ効果が出た要因だと考えられる。その際、特別支援委員会から情報共有された「手立てと配慮」に関しては、効果的であり今後も実践していく。その他、具体的な方策も有効であったが、自尊感情の心配な児童を教職員で情報を共有し、校内で連携しながら見守ったり、働きかけた効果も大きい。	１点台が０％でないことを踏まえ、引き続きの指導・支援が必要である。クラス替えや学年が変わり、環境が大きく変化する年度初めは特に丁寧に児童の実態を把握していく。来年度は、自尊感情調査からQ-Uアンケートの実施に変更し、子どもたちの学校生活における満足度と意欲，さらに学級集団の状態を把握していく。結果を共有し、問題解決に向けて学校全体で指導改善に努めていく。	
		⑦すれ違った先生や外部の方に、場に応じた（明るく元気に・一度挨拶した人には黙礼など）自分から挨拶ができる児童を育成する。	○校長講話であいさつに特化した話をする。特に高学年の自覚を促す。 ○生活指導年間目標を重点化し、児童の挨拶の習慣が身に付くよう徹底する。 ○１～４年生、５・６年生の発達段階により、TPOに応じたあいさつができるように指導する。（例；黙礼、追い越し時のあいさつ） ○教職員が率先して挨拶を児童に行い、模範的な姿を見せる。	A　90%以上の児童が身に付いている B　80%以上90%未満の児童が身に付いている C　身に付いている児童が80%未満	63% C	84% B	89% B	当初の結果から段々と身に付いていると答える児童が増えている。挨拶の習慣が身に付くよう、年間の重点指導目標とし、継続的な指導が効果的であったと考えられる。コロナ禍の中、朝の教室入室時には必ず担任がいるので、「おはようございます。」ときちんと挨拶をしながら入室できる児童が増えている。	教員からの主観的な見取りとして、大きな変化を感じられないとの声もある。決められた場面での挨拶に関しては、身に付いてきている様子も見受けられるが、自ら挨拶ができる児童は多くないとの声もあった。学校として、先ずは、「自ら挨拶をする児童の育成」次に「気持ちの良い挨拶ができる児童の育成」と、共通した目標をもって指導していく。挨拶についての価値観を児童と共有できるようにしていく。	
げんきよく	○心と体の健康教育の充実（５）	⑧基礎的な体力向上における課題克服のための取組に努める児童を育成する。	○感染防止策を講じた運動や遊びを推奨し、短縄月間の取り組みを充実させる。 ○昨年度の東京都の体力テスト結果を分析し、とくに苦手な種目について、特化した改善への取り組みを実施する。 ※１年生は今年度の体力テスト結果が戻り次第評価を行う。それまでは、体力テストの各種目のやり方について指導を行う。 ○体育授業の常時活動として、苦手な種目を克服できるような運動を準備運動などに取り入れる。	A　運動や遊び、短縄月間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が９０％以上 B　運動や遊び、短縄月間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が７０％以上９０％未満 C　運動や遊び、短縄月間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が７０％未満		62% C	76% B	短縄月間で表彰を行うなど、児童が意欲をもって運動に取り組めるような工夫を行ったことで、すすんで体を動かす児童が増えた。また、来年度の体力テストに向けて、毎回の授業で行う課題克服のための準備運動を、年間指導計画に盛り込み、全校をあげて取り組みを始めることができた。	コロナ禍で、児童の運動不足の実態が浮き彫りとなり、体力テストの結果が伸び悩んだ。全校をあげての「元気アップタイム」などの取り組みも縮小せざるを得ず、運動する機会を設けることが難しかった。来年度は、教室でできる程度の運動を各教室で行う元気アップタイムを実施するなど、運動を楽しむ機会を設けて児童の意欲を高めていく。	・コロナ禍で十分に運動もできないかもしれないが、体を動かすことの楽しさを感じることができる指導をお願いしたい。 ・コロナ禍で運動に制限がある中、先生方が様々な工夫をされている。
		⑨新しい生活様式を自らすすんで取り組み、自分の身は自分で守る児童を育成する。	○教室移動時の整列時や、授業における集合時などの場面で、常にディスタンスをとるよう指導を繰り返し、スタンダードにしていく。 ○手洗いの仕方や休み時間の過ごし方等の生活様式に関する注意事項について、まずは教職員での共通認識を図る。 ○委員会の活動や、各学年の教科等の指導内容とを結びつけ、子供たち自身の学習活動の一環として、新しい生活様式にすすんで取り組めるよう指導、助言を行っていく。	A　90%以上の児童が身に付いている B　80%以上90%未満の児童が身に付いている C　身に付いている児童が80%未満	77% C	82% B	88% B	手洗いの徹底・無言配膳・無言給食等、実践を重ねさせ、その変容をほめて価値つけることで段々と児童に身に付けさせてきた。委員会等を通じて、児童から発信される呼びかけの成果や、教職員の共通認識を図って行われる指導の成果もあったと考えられる。相手と常に距離をとる事に関しては、児童の成長や発達段階によって難しい場面も多いのが現状であった。	児童にとって負担感の強い指導にならないよう、工夫しながら進める必要がある。新しい生活様式を自ら進んで取り組むように児童がなるには、必要に迫られて頑張るのではなく、自分の意志で行動できるように仕向けていくことが必要である。そのための、教職員の指導について共通認識を図りながら、褒めて・認めて・価値付けていく生活指導を繰り返していく。	・運動が得意な子も苦手な子もいると思う。多様な児童への丁寧な指導をしてもらいたい。 ・新しい生活様式にも慣れているが、今後も引き続き徹底していってもらいたい。